

「男、突っ走る！」

第20回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

尾形 佐藤 西澤 井深 入沢	尾形 藤野	宮頭 鬼川 五十野	宮頭 美川 五十野	田崎 山辺 高階 中岡 滝岡	木内 雅也
安代 篤雄 隆彦 武茜	安代 篤雄 隆彦 武茜	春奈 美彩 孝之 真弓	春奈 美彩 孝之 真弓	良樹 一磨 康行 壮吾 由紀恵	雅也
(53) (59) (39) (32)	(53) (59) (39) (32)	(17) (17) (17) (17)	(17) (17) (17) (17)	(17) (17) (17) (17) (17)	(17)
中央高校2年4組↓3年2組担任	中央高校2年4組↓3年2組担任	中央高校2年↓3年6組生徒	中央高校2年↓3年6組生徒	中央高校2年↓3年2組生徒	中央高校2年↓3年2組生徒

1 木内家・全景（夜）

2 同・居間

雅也が台所でお菓子を作っている。

N 「明日はバレンタイン。この頃は友チョコという言葉が流行り出した時期で、僕もすっかりお菓子作りにはまっていました」

× × ×

オーブンレンジから、焼き立てのチーズケーキを取り出す雅也。

N 「特にこの年は、クッキー等のお菓子以外にも、チーズケーキやチョコケーキも作り始めていました」

3 中央高校・2年2組教室

雅也ほか生徒たちが昼食を食べている
——と、春奈が入ってくる。

春奈 「失礼します。（と雅也の席にやってきて）はい、バレンタイン」

と、タッパーを渡す——雅也、受け取

ると、ふたを開ける。チーズケーキが入っている。

雅也「お！ チーズケーキじゃん」

春奈「喜んだ？」

雅也「もちろん。俺も、春奈に渡したいのがあるんだよ」

と、タッパーから作ったチーズケーキを取り出す。

春奈「ありがとう」

雅也「手作りだから。美味しく食べてね」

春奈「はい（と出ていく）」

と、振り向きざまに手を振る春奈――
振り返す雅也。

一磨「付き合っ……」

雅也「（遮って）違います」

と、由紀恵が袋に入ったお菓子を渡す。

由紀恵「はい。私からもバレンタイン」

雅也「サンキュー」

由紀恵「食べてみて」

雅也「分かった」

と、袋から小さいチョコボールを取り

出すと、食べる。

雅也「うん、美味しい。（と険しい顔になり）

ん……辛ッ……辛いよ、これ……（と咳き

込む）」

一磨「何入れたの？」

由紀恵「わさび」

雅也「（咳き込みながら）わさび……？ 何

でそんなもの……」

由紀恵「でもそのリアクションは三十点かな」

雅也「おい……こっちは苦しい思いしたんだ

ぞ……」

由紀恵「ちよつと多すぎたかな」

雅也「まさかもらったお菓子の中に大量のわ

さびが入ってるなんて思わないでしょうが」

由紀恵「来年はバージョンアップするね」

雅也「しなくて良いよ、全く」

と、水筒のお茶を飲む——大きく咳払

いをする。

佐藤、西澤、安代が仕事をしている――
紙袋を持った雅也が入ってくる。

雅也「失礼します。（と佐藤のもとへ行く）
明先生。今日バレンタインということで、
お菓子作ってきました。二年生の学年団の
先生方でぜひ召し上がってください」

と、紙袋を渡す――佐藤、袋を受け取
り、

佐藤「お前が作ったのか？」

雅也「もちろんです」

佐藤「そういえば、去年も作って持ってきて
たな」

西澤「そうだったんですか」

雅也「毎年恒例のイベントだと思っ
てくださ
い」

安代「確かに去年も職員室に持
ってきてくれ
たわね。一年生の先生方と食べたの覚えて
る」

雅也「去年はクッキーでしたが、今回はバ

ジョンアップして、チョコのパウンドケーキにしてみました」

安代「ちゃんと進化してるんだ」

佐藤「ありがとう。後で、他の先生たちにも配っておくよ」

雅也「よろしくお願いします」

と、出ていく。

5 同・コンピュータ室前の廊下

雅也、孝之、美彩、春奈が机を囲んでお菓子を食べている。

春奈「やっぱパンテーンの作るお菓子は美味しいわ」

雅也「春奈のケーキだって」

孝之「でもそれ、買ったやつでしょ」

春奈「おい」

雅也「五十川君。真実を口にすることが時に仇になるってこと覚えておいたほうが良いよ」

春奈「どういう意味？」

雅也「別に。けどさ、買ったものでも作ったものでも、こうしてくれるだけでどんだけ嬉しいか」

春奈「パティシエになったら良いじゃん、パンテーン」

雅也「俺は脚本家になるって決めてるの」

春奈「脚本家より、お菓子作りのほうが仕事になるんじゃないの」

雅也「お菓子作りは趣味のままが良いの。好きなお菓子を好きな時に作る。それで十分」

美彩「まあ、パンテーンはずっと文章書いてきたもんね。それにお菓子作りの現場だつて、結構体力勝負だろうし。パンテーンは趣味程度のほうが良いんじゃない」

雅也「そうそう。自分でよく分かってるもん。飲食って結構な重労働だから、とても自分には向いてないって」

孝之「けど、脚本書くのにも結構な体力いるんじゃないの？」

雅也「まあ、確かに少なからず体力は使うよ。」

けど現場でバタバタするより、机に向かつて原稿書いて体力使うほうが、自分には向いてる気がするの」

春奈「なるほど」

と、松野がやってくると、

松野「あ、木内。さっきお菓子もらったよ。

ありがとう、美味しかった」

雅也「それは良かったです」

松野「何？ みんなでお菓子パーティーでも

やってるの？」

美彩「今日はバレンタインですからね。みんな、

たくさんお菓子持ってきてたから、食べようと思っ

て」

松野「まあ、一年に一度のイベントだからね。

今日の部活は自習にしよう。食べ終わった

ら、みんな各自で検定勉強とか自主練して

くれて良いから」

一同「やったー！」

N 「一ヶ月が経過し、春休みを直前に控えたある日のことです。僕と春奈は、公民館で開催される和太鼓部の演奏会に来ていました」

7 同・ホール

雅也と春奈が観客席に座って演目を見ている――ステージ上で生徒たちが和太鼓と横笛を演奏している。その中で横笛を吹いている一磨と康行。

N 「かっちゃん和康行は、和太鼓部の中で横笛を担当していました。ステージの上で輝くその姿に、僕は少なからず感化されました」

8 同・表

雅也と春奈が歩いている。

春奈 「すごかったね」

雅也 「うん」

春奈 「何かさ、友達とか知ってる人が、ああ

いう人前でステージに立って何かをやるのを見ると、何かこう、不思議な感覚になることない？ 普段見ているその人とは、全く別人に見えるというかさ」

雅也「分かる。俺も、笛吹いてた友達二人いたでしょ。普段毎日のように教室で顔合わせて喋ってるはずなのに、ステージの上立っていると、同じ人には見えなかった」

春奈「私たちには無縁だもんね、ステージの上立っつなんて」

雅也「そりやそうだよ」

春奈「けどパンテーンは、脚本家目指してるから、ああいうステージというか、舞台の脚本も書くんじゃないの？」

雅也「そりやいずれは書けるようになれば良いけどね。俺が今書いてるのは、ドラマとか映画っていう映像を想定したやつだから、また違うんだよね」

春奈「やっぱりドラマと舞台じゃ、違うの？」

雅也「そりや違うよ。映像だったら場面転換

があつたり、ロケとか撮影場所は自由にできる。でも舞台はステージの中で表現しなきゃいけないから、見せ方も工夫しないと
いけないの」

春奈「なるほどね……でもパンテーンは、そういう表現を脚本でやりたいんでしょ？」

雅也「まあね。これからどうなるのか分からないけど、やっぱりこういう仕事って書かないと何も始まらないからね」

春奈「私は応援してるからね」

雅也「ありがとう。みんながそうやって応援してくれるから、俺も頑張れる。ファンのために、これからも書き続ける。それが、今俺が一番やらなきゃいけないことだと思う」

春奈「頑張ってるね」

雅也「うん」

大きく頷く雅也。

N 「新学期が始まりました。ついに三年生のスタートです」

10 同・職員室

佐藤が仕事をしている。

N 「とうとう三年間持ち上がりで、引き続き佐藤先生が学年主任となりました」

11 同・3年2組教室

安代が資料を配っている――雅也を始めとした生徒たち、資料を後ろの生徒に回す。

N 「西澤先生が一年一組担任となり僕らの学年を離れ、それに伴い、学校生活最後のクラスとなった三年二組の担任には、一年ぶりに尾形安代先生が戻ってきました」

と、安代と一緒に資料を配っている入沢茜（32）。

N 「松野先生は再び二年生の副担任として残ることになり、新しく僕たち三人二組の副

担任となったのは、昨年この学校に赴任をし、昨年から僕ら情報活用コースの授業の教科担任をしていた入沢茜先生です。女子たちにとっては、担任も副担任も女性の先生ということは、少し安心感があったのかもしれません」

× × ×

教室掃除をしている生徒たち。

雅也が教室後ろの黒板に時間割を書いている――由紀恵がやってくると、

由紀恵「まさか、また学級代表に立候補するなんて思わなかった」

雅也「これで通算一年ってことになるね」

由紀恵「本当に良かったの？」

雅也「どうせみんなやりたがらないでしょ」

由紀恵「男子は特にね。女子は一人一回やるうってことになったから、この前期は私が女子学級代表になったけど」

雅也「俺、この仕事には慣れてるからね。正直、今のこのタイミングで、慣れない仕事

をするよりかは、ある程度勝手の分かる係
のほうがいいと思つて」

由紀恵「なるほどね。脚本家になるために、
少しでも学校生活での負担を減らそうつて
わけか」

雅也「そういうこと」

由紀恵「賢い選択かもね」

と、壮吾が入ってくると、

壮吾「うちー、明日って時間割変更ある？」

雅也「明日は特にないよ。安代ちゃんが配っ
てくれた、通常の時間割通り」

壮吾「そうか」

雅也「（ため息をついて）明日も体育か」

壮吾「そっか。他のクラスの選択授業の関係
で、通常の体育が週二回、選択授業の体育
が週二回あるんだ」

雅也「週四回も体育なんて、こんな悲しいこ
とある……。何だよ選択体育って」

壮吾「体育が四回もあつて嫌だと思つてる人
がいるなんて思わなかったな。俺も体育苦

手だけど、楽しくない？」

雅也「苦手なものに楽しいもつまらないもの
いでしょ。嫌いものは嫌いなんだから」

壮吾「本当にうちーは、体育の授業が嫌い
なんだね」

雅也「もう大嫌いだよ」

しよっぱい顔の雅也。

12 同・コンピュータ室

雅也、孝之、美彩、春奈がパソコンで
作業をしている。

美彩「そっか。今回も出るんだ、生徒会選挙」

雅也「うん…：前回の悔しさをバネに、もう
一度リベンジしようかと思って。ただ、も
し生徒会選挙に当選したら、部活に來れな
くなる日もあるかもしれないと思ってね。
一応、副部长じゃない。部長の五十川君の
負担が増えないかどうか心配でさ」

孝之「そんな心配無用ですよ。木内君は、生
徒会選挙に専念してください」

美彩「そうよ。パンテーンの代わりは、私たちで何とかやるから」

春奈「次こそは、ちゃんと当選してほしいもの。今は生徒会優先で良いと思うよ」

雅也「みんな……ありがとう」

美彩「私たちは、パンテーんにちゃんと当選してほしいの。前回落選したとき、私だつてびっくりしたんだよ」

孝之「あの僅差で負けたこと、相当悔しかったんだろうなって、木内君の雰囲気見れば分かるもの」

雅也「そうかな……」

春奈「最初から勝ってるぐらいの自信持たなきゃ。自信のない人に、票なんて入れないよ」

雅也「春奈……」

春奈「強気で行こう。票は俺に入れるものだからっていう勢い持ってさ」

雅也「ありがとう……」

大きく頷く春奈。

13 同・生徒会室

井深が仕事をしている——雅也が入ってくる。

雅也「失礼します」

井深「木内、どうした」

雅也「生徒会選挙の立候補届を出しに来ました」

井深「（書類を受け取り）リベンジか？」

雅也「はい。前回、六票差で負けましたからね。一度は辞めようとも思ったんですけど、やっぱり一回で終わらせたくなくて」

井深「そうか」

雅也「対抗馬はどうですか？」

井深「今回、書記への立候補は木内含めて三人だ」

雅也「（書類を見て）うわ……残りの二人、現役の生徒会役員じゃないですか」

井深「そうだな。どうする？」

雅也「やります。吉と出るか凶と出るか分か

りませんが、やらずに後悔したくないので」

井深「そうか。じゃあ、立候補届、正式に受理するぞ」

雅也「はい、よろしくお願いします」

14 同・廊下

雅也が難しい顔で歩いている。

N「かどけんが辞める前に僕に言った『生徒会選挙に出て、俺の分まで学校生活を楽しんでくれ』。そう、今回の生徒会選挙は前回のリベンジと同時に、かどけんの分まで学校生活を楽しむという二人の約束を果たすためでもあるのです。ですが、今回の対抗馬も生徒会経験者。春奈の言うように、自分に自信を持っていなければいけないという気持ちも分かるのですが、やはり自分の中では不安なほうが勝っていました。この何とも言えない不安な状態が、しばらく続いていたのです」

15 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がパソコンで脚本を書いている。

N 「そんな不安をかき消すために、僕は夢中で脚本を書いています。生徒会選挙に当選するのと同じ勢いで、まずは自分が脚本家になるために、脚本家を募集している事務所に送る用の原稿を、ただひたすらに。今の自分には何ができるのだろう、どんな行動をしたら良いのだろう……生徒会選挙と脚本家への夢という、二つの目標を形にするために、僕はただ目の前に迫る壁を壊す手段を探していたのです」

16 中央高校・3年2組教室

雅也、一磨、良樹、康行が昼食を食べている。

一磨 「生徒会選挙、もう立候補は出したんでしょ？」

雅也 「うん」

一磨 「話す内容は決まってるの？」

雅也「何とかね」

一磨「推薦演説は？」

雅也「それが、まだ。またかつちゃんにお願いするわけにはいかないと思って」

一磨「俺は今回遠慮しとく。正直、俺も辛いんだよね。また木内が落ちたらと思うと。」

前回のことは、俺も責任感じてるから」

雅也「前回落ちたのは、かつちゃんのせいじゃないよ。ただ、俺の実力不足だったし、変な自信もあつたんだよね。これぐらいやれば当選するだろうって。甘く見てたんだよ。だから、それが仇になって落ちたの」

一磨「けどねえ……」

雅也「生徒会選挙は、少しでも気が緩んじやダメだって分かったから。だから今回は、より念入りに準備しないと」

良樹「でも、まだ決まってるんだろ、推薦

演説」

雅也「そうなんだよね。誰か、この子なら行けるって子いないかな」

康行「どうかなあ。今すぐにはパツと思ひ浮

かばないなあ」

雅也「誰かいるかな」

と、真弓が入ってくる。

真弓「失礼します」

雅也「あれ、真弓さんどうしたの？」

真弓、雅也のところまで来ると、

真弓「ねえ」

雅也「？」

真弓「私が、ツリーインの推薦演説者になる」

雅也「……ええ！？」

啞然としている雅也。

つづく